
暖地型飼料作物の導入に関する研究

第1報 ハチヂヤウススキ (*Miscanthus sinensis*
ANDERSS. var. *condensatus* MAKINO) の栽培について

讃井 芳胤*・井手迫金一*・木場 俊彦*

SANUI, Y., IDESAKO, K. and KOBAYASHI, T. Studies on the Tropical Forage
Crops in the Warm District of Japan.

1. On the Hachizyosusuki (*Miscanthus sinensis* ANDERSS.
var. *condensatus* MAKINO).

夏から秋にかけて来襲する台風の常襲地帯にある鹿児島県は、亜熱帯的気象と耐風性を特に考慮したところの飼料作物の選定導入が必要である。吾々は亜熱

*鹿児島県農業試験場

帯、或は熱帯地方において作られている飼料作物について、導入適否を検討する目的で若干の暖地型飼料作物について栽培試験を行つている。今回はハチヂヤウススキについて報告する。

1. 試験方法 供試したハチヂャウススキは、八丈島より種子島に10数年前移入されたものを、昭和28年種子島農業高等学校より苗を取寄せ栽培増殖したものである。栽植期3月20日、1区面積及び区制5坪

3区制、畦巾3尺、株間1尺5寸、厩肥1,000、硫酸5、過石5、塩加2（反当）、栽植時期は昭和30年3月～31年2月、栽植本数は1本、3本、5本植、刈取回数は1～3回について調査を行った。

2. 試験成績 1) 栽植時期について

第1表 栽植期別活着歩合

栽植期 区分	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
	活着歩合%	100	75	28	58	0	23	50	16	38	69	19

註 1) 5坪当り40～32株の3区平均値
2) 苗は栽植時期において母株より株分苗

3. まとめ 1)

本試験は種子島より取寄せたハチヂャウススキの青刈飼料としての特性を知るため、栽植時期、栽植本数並びに刈取回数等について栽培試験を行った。

2) 栽植時期は母株よりの苗株の株分け採取時期、本数並びに取扱方にもよるが、活着歩合及び青刈収量から見て2～4月が適期である。

3) 栽植本数は1株当り3～5本植がよ

く、活着すれば1本植でも生育、青刈収量には大差は認められない。但し3～5本植の場合は苗株は附着したままの方がよい。4) 出穂期における性状は野生スキに似ているが、一般に各器々が肥大で、特に葉が大きく多肉であり、牛馬の嗜好度も高い。5) 刈取後の再生茎は少く、絶えず根際より分けつ発生する萌芽の伸長により、早春より晩秋まで3回以上の刈取が可

2) 栽植本数と青刈収量

第2表 栽植本数別青刈収量

区分 栽植本数	出穂期(9月16日)			2番刈(12月8日)			合計
	草丈 (cm)	株当茎数 (本)	反当生草 重(貫)	草丈 (cm)	株当茎数 (本)	反当生草 重(貫)	反当生草 重(貫)
1本植	190.2	25.5	690	99.8	17.0	261	951
3本植	193.3	27.9	753	100.9	16.5	246	999
5本植	193.0	89.8	784	109.7	14.0	263	1,047

註： 1) 草丈茎数は各区20株3区の平均
2) 生草重は2.5坪刈の3区平均の反当換算

3) 刈取回数と青刈収量(貫/反)

第3表 刈取回数別青刈収量

栽植本数 刈取回数 刈取期	3回刈				2回刈			1回刈
	5月	7月	9月	合計	6月	9月	合計	7月
5本、3本、1本植の平均	296	511	679	1,504	857	1,046	1,903	1,642

註： 1区5坪の全刈生草重で3区平均反当換算したもの

能で、その都度300～700貫の青刈生草が得られる。

6) ハチヂャウススキは多年生草本で、冬季間も緑色を保ち、夏季に叢生繁茂する。この時期における台風、潮風等に対して茎葉の損傷が殆んどないので、畑地の周囲作として適当な肥培管理の下に栽培すれば、飼料兼用防風効果も期待出来る。